

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマで双子育児⑩

浅田 朋子

3歳半になった双子は昨年9月から幼稚園に通い始め、慣らし保育期間も終わり、通常保育が始まった。最初は目新しさもあってご機嫌で通っていたが、しばらくすると幼稚園に行きたくない！と激しく泣く時期がきた。その頃は、幼稚園に連れて行くのにこんなに辛い思いをするくらいなら家で世話をした方がましだと思ったくらい、毎日の送り迎えが憂鬱でしやうがなかった。しかし、そんな時期も過ぎていくもので、今は幼稚園に行かなくてはいけないものなのだと理解したのか、そんなにぐずることもなくなった。

唯一のママ友のレーナちゃんの息子、イタリア・ロシア人ハーフの双子男児（過去の弱小部隊）が登園前に、アパートの住人全員に聞こえるかと言うくらいの大声で双子の名前を呼び、そして時には2階から4階の我が家まで呼びにくる。屈強になった双子男児のぶっとい腕で力いっぱいドアを叩く（もしくは足で蹴る）ので、「小学生くらいになったら、この扉破られると思うよ・・・」と夫が言った。

嵐のような数ヶ月が過ぎ、だんだん落ち着いてくると、幼稚園のシステムや運営に色々疑問がわいてきたのである。

まず送り迎えの時間。朝8時から9時のあいだに登園し、午前のお迎えは14時から14時半、午後のお迎えは16時から17時の間にいかなければならない。それ以外の時間は原則として園内に立ち入りできない。



【日曜日はパパとピザ作り】

ある時、小児科の検診があったので「朝10時半くらいになります（9時以降に登園する際は事前に報告しないとイケない）」と伝えると、「・・・だ

ったら11時までには絶対来て。遅れるようなら14時～14時半の時に入ってください」といわれた。また16時少し前にお迎えに行き、幼稚園正門のベルをならしたら「16時まで待っていてください」と、園内にさえ入れてもらえなかったこともある。

いいかげん極まりない国なのに、こんなところだけきっちりしていることにイラつき、そしてこの時間内に迎えにくることが親にとっていかに負担であるかということを知っているのだろうか？と考えると怒りがこみあげてきた。

また、教員、用務員、給食サービスのストライキ(sciopero)が頻繁にあるのも、子供や親にとってみれば大変迷惑である。ご存知の方も多いと思うが、イタリアはストライキやデモがとても多い。公共交通機関などはしょっちゅうで、さらにそこに市民のデモなどが加わり交通渋滞を招き、ローマ市内はいつも混雑している感じがある。

学校職員やサービスのストライキは事前に通達されるが、実際行くかどうかは当日幼稚園に行かないと分からないので、働く親は祖父母に子供を預けるかベビーシッターを雇うのである。

教員のストライキは大規模なのでほとんどの親がストライキを行うと予測して事前に段取りし幼稚園に連れて行かなかったが、私たちの幼稚園の教員は参加せず、結局、通常どおりであった。

4月には園舎の点検で屋根瓦が一部落下する恐れがあることがわかり、すぐに正門から園庭が立ち入り禁止になった。

正門が閉鎖されたので裏門からの出入りになるのだが、併設されている小学校と同じ入り口になり、1メートルしか開いていない門に登校時間、子供たちと送り迎えの親が殺到して大混雑かつ園児には大変危険な状況であった。そして結局1ヶ月間子供たちは外遊びが出来ず、出入り口も裏門のみであった。

工事期間がはまり出されていたが、最初の3週間何の手もつけられず、結局、最後の1週間だけで終了した。

もちろん保護者たちは「なぜまだ工事が始まらないんですか！」と園長に抗議を言いこいていたが、「私がローマ市にそういっても何も変わらないから、あなたたちから直接ローマ市に抗議してください」と言われたようだ。では園長さん、あな

たは何のために園長をしているのですかと言いたくなるが、こういう言い分がイタリアではわりと当たり前を受け入れられるのである。

保護者たちはローマ市にメールで抗議文を送ったようだった。園長の判断で裏門の混雑は解消されるような気がするのだが、そういう努力も工夫もないのである。それは市が考えることであって、自分の仕事じゃないと思っているのだろうか。

このようなことがたびたびおこり、子供は大人たちの都合で振りまわされているのである。ストライキや園の工事の遅れよりも、子供たちに影響がでないようにそれらを調整する気がないローマ市が問題である。園児たちのことなんて何とも思っていないのであろう。

このようないい加減な対応に小さい頃から慣れてしまい、世の中はこういうもんだと思って、大人になっていくのであろうか。



【おばあちゃんお手製の Pasta は二人のお気に入り】

幼稚園の長い夏休みも、親にとって頭の痛い問題である。

両親共働きの場合、2ヶ月半もの休みをどうするのか。夫の妹が正社員としてイタリア企業で働いているのだが、夏期休暇としてとれる休みは最

大で2週間ほどである。

職種によってももちろん差はあるだろうが、8月15日のフェツラゴースト(ferragosto)祝日前後に1～3週間の休みをとる人が多い。当然子供の休みを全部カバーできるわけがないので、たいていの親は祖父母に孫の面倒を頼むのだが、そうはいかない場合、高いお金を払ってサマースクールに入れたり、ベビーシッターを雇ったりするのである。これは大きな出費である。

せっかく公立の幼稚園に入れても、ほぼ3ヶ月分の保育費が私費でかかるのである。専業主婦にとってみても2ヶ月半もの間、家で子供たちを1人で一日中みなければならぬのは大変なことだ。

子供や親のことを考えたのではなく、ローマ市や幼稚園側が運営しやすい方法をとっているだけなのである。施設を利用する側ではなく、される側に有利になっているシステムなのだ。

ある日、また14時少し前に幼稚園に着き、仕方がないので正門前でぼーっとしていたら、フランス人のミラちゃんのお父さんが来た。たいていの子は16～17時のお迎えだが、ミラちゃんは必ず14時お迎えなのである。

ミラちゃんはお父さんもお母さんもフランス人で、両親の仕事の都合でローマに住んでいる。金髪に青い目で、お人形のように愛らしい。

最近、双子とよく一緒にいるようで「今日は誰と遊んだの?」と聞くと「ミラちゃん!」というようになった。

「ミラちゃんと何をおしゃべりしたの?」と聞くと「ミラちゃん、しゃべらないよ」という。うーん、そうか、まだフランス語しかしゃべれないのかな。

「じゃあ、どうしてるの?」「そばにいるの」。

どうやら双子とミラちゃんは同じテーブルに座り、もくもくと絵を描いたり、おままごと遊びをしたりしているものの、ミラちゃんは無言が多いらしい。ちなみに双子のイタリア語は完璧である。完全に第一言語はイタリア語である。日本語の聞き取りは完璧にできるが、返事はほぼイタリア語である。

気になったので先生に「ミラちゃんはフランス語しかしゃべらないんですか?」と聞くと、「いいえ! あの子はイタリア語ぺらぺらですよ」といわれた。

じゃあ、なんでしゃべらないの、ミラちゃん…。しゃべってあげてよ、双子に。無口なのは言語が関係しているのではなく、どうやらミラちゃんの性格のようである。

さて、お迎えが一緒になったので、ミラちゃんのお父さんに「最近双子はミラちゃんによく遊んで楽しいみたいです」と言ってみた。普段は無表情なお父さんだが、少し微笑んで「ミラもよく双子の話しをしますよ。今日は何して遊んだとか」と言った。それを聞いて、すこし嬉しくなった。

14時になり園内に入ると、園児たちは園庭で遊んでいた。

ミラちゃんのお父さんは、いつも馬車のように立派な木製のチャイルド・トレイラー(自転車用ベビーカー)をつないだ自転車で迎えにくる。チャイルド・トレイラーの窓には雨風をきちんと防げるシートまでついている。ミラちゃんはそのにお姫様のように座って通園されていらっしやるのだ。夫はこの馬車を見て、「プリンセス・ミラ号」と命名した。

私たちが迎えにいくと、園児たちはこのチャイルド・トレイラーに群がり、興味津々で近寄って見ては乗りたそうにしている。

「すごいなあ!」「かっこいい!」と、男の子たちは大興奮だ。アデレ先生も「いいわね～、パパが馬車でお迎えよ～」と微笑んでいる。

すると1人の男の子がミラちゃんのお父さんに「ねえ、どうしてこの自転車で迎えにくるの?」と聞いた。お父さんは無表情で「歩くのが嫌だから」と即答した。園児たち「……」。私とアデレ先生は顔を見合わせた。子供の質問なんだから、もうちょっと言い方あるやん…。

沈黙の中、ミラちゃんは無言でさっさと乗り込み、チーンと窓の風よけシートを閉めた。

我が道を行くフランス人親子は、またしてもさっさと帰って行ってしまった。

そして、帰っていくミラちゃんのお父さんの後ろ姿を見送りながら、彼はイタリアの幼稚園のことをどう思っているんだろうと考えた。

(元当館語学受講生)

カラブリアにのこるビザンツの記憶

～ロッセーノの福音書～

深草 真由子

カラブリア州の北部、イオニア海をのぞむロッセーノという小さな街に、世界のどこを探しても見あたらない貴重な宝物がある。Codex Purpureus Rossanensis（ラテン語。Codex とは冊子状の手書きの文書のこと、Purpureus は「紫色の」、Rossanensis は「ロッセーノの」の意味。以下、これを Codex と略す）と呼ばれる写本のことで、ユネスコの「世界の記憶」にも登録されている。

しかし不思議なことに、地元のカラブリア人にはほとんど知られていない。筆者も、イギリスの古文書学者 Christopher de Hamel の *Storia di dodici manoscritti* という本の「聖アウグスティヌスの福音書」についてのページを読んでいたときに、たまたまその存在を知ったのだ。



【博物館で見ることのできる Codex】

初代カンタベリー大司教アウグスティヌスのものだった「聖アウグスティヌスの福音書」は、六世紀に作られたラテン語の写本である。ここまで古い、ミニチュールつきの福音書は、世界に数えるほどしか現存しない。エチオピアの修道院で最近発見された、エチオピア古語で書かれたもの、

Rabbula という署名があるため「Rabbula の福音書」と呼ばれているシリア語のもの、フランスの将軍によってトルコのシノップで発見され、現在はパリに保存されているギリシア語のもの。これらにロッセーノの Codex が加わる。

Codex にまつわるおもしろい逸話を著者が紹介している。十九世紀、コーパス・クリスティ・カレッジの図書館の館長が「どうしても欲しい」と大金をひそかに用意し、ナポリ発の夜行列車に飛び乗ってロッセーノに向かおうとしたところ、それを良しとしない妻と大げんかになった。もし彼女の反対がなかったら、Codex は今ごろ「聖アウグスティヌスの福音書」と並んで、ケンブリッジの蔵書目録を飾っていたかもしれない。



【ロッセーノの旧市街】

Codex を所蔵する博物館はロッセーノの中心、カテドラルの脇にある。にぎわいのある平野部のニュータウンを通りぬけ、大きな岩山をのぼっていくと、アスファルトが石畳に変わるあたりから、趣のある砂色の旧市街がはじまる。カラブリアの街はたいてい高台にある。下手にはオリーブ園がひろがり、その先には海が、さらにその向こうにはバジリカータ州の陸地がみえる。

観光客は多くはない。だがときどき、ドイツ語やフランス語の会話が聞こえてくるから、外国からやってくる人もいるのだろう。

博物館では、大きなスクリーンに映しだされる高画質のイメージを駆使して、ガイドが Codex の中身を解説してくれる。弁護士になるためにミラノとロンドンで法律を勉強したものの、やっぱり自分の一番好きなことをしたいと、生まれ故郷で観光業に情熱をささげている男性が案内役になってくれた。たいへん親切な人で、ミュージアムショップで「*approfondimento*（掘り下げ）のために」と言っていて、博物館が出している公式ガイドブックと、地元の中学校の元教師で、郷土史にくわしいフランコさんの書いた本を、筆者のために選んでくれた。

Codex は『マタイによる福音書』と『マルコによる福音書』の一部を収録している。もともとは四つの福音書がセットであったと思われるが、『ルカによる福音書』と『ヨハネによる福音書』は失われてしまったのだろう。

透明のガラスケースに収められてあり、当然ながら手にとってみることはできないが、ずっしりとした重みは見るだけでも伝わってくる。それぞれのページは大きさや厚さが均一でなく、湿気を含んだ本のように少し波打っている。専門家が調査のためにやって来たとしても、おそらく自由に扱わせてはもらえないだろう。一枚一枚、慎重にページをめくるのは、手袋をはめた司書の役目にちがいない。

写本は百八十八の羊皮紙からなり（四十七匹分の子羊の皮が使われているとのこと）、そこに丸みのあるアンシャル体のギリシア文字が、金銀のインクで一画一画、丁寧に書かれている。言語はビザンツ帝国時代のギリシア語である。

帝国の文化の中心地のひとつであったシリアのアンティオキアで、五世紀から六世紀のあいだに制作されたというのが、もっとも有力な説だとガイドブックにはある。フランコさんの本では他の都市、たとえばコンスタンティノープルやカッパドキア、エフェソス、エジプトのアレクサンドリアなどで

制作された可能性も排除できないとされている。

どちらにせよこの写本は、ビザンツ帝国のキリスト教修道院で、写字生たちの共同作業によって仕上げられたのだ。そしてその後、パレスティナの都市カイサリアに持ち運ばれたのではないかという説もある。四世紀の初めにカイサリアで作られた聖書の写本に添えられていたという「エウセビオスの手紙」を、Codex も備えているからである。

ではビザンツ帝国で作られたこの写本が、現在ロッセーノにあるのはどうしてなのだろう。

実はこの街は「南イタリアのラヴェンナ」と称されるように、六世紀半ばから十一世紀半ばまでビザンツ帝国の支配下にあり、しかも大いに繁栄し、文化的・宗教的な中心地になっていた。だから Codex のような東方由来の遺物があっても、なんらおかしくはないのだ。

興味深い仮説は、八世紀の聖像禁止令の影響で、イコンを崇める聖職者たちが東方からロッセーノに移り住み、そのときに Codex を携えてきたのではないかというものである。であれば、イエスの生涯を物語る美しく繊細な彩画で飾られたこの写本が今ここにあるのは、聖像破壊運動の暴力に命がけで抵抗した信徒たちのおかげなのだ。



【弟子にパンを分け与えるイエス】

Codex の十五のミニアチュールのうち、博物館で実際に見ることができるのは、イエスがパンとぶどう酒を弟子たちに分け与える二つの場面である。「これはわたしの肉である」「血である」と説

くイエスの面前へ、六人の弟子が歩み寄る(写真では一番うしろの人物が切れてしまった...)。前の二人は腰から下がぴったりと重なるようにして描かれているが、そうすることでスペースの節約になるうえに、身をかがめてパンを受け取り、天に腕をのばして感謝をささげる一連の動きの躍動感がうまく表現されている。その下にいるのは、上の出来事を先立って語った旧約の預言者たち、左からダヴィデ、モーセ、もう一度ダヴィデ、そしてイザヤである。

どのミニアチュールも金、銀、赤、青、水色、黒、白、ピンクなど鮮やかな色で飾られ、実に手がこんでいる。ページそのものは桃色がかった茶色をしているのだが、実は Codex の羊皮紙はポルポラと呼ばれる紫色に染められていたのである。それは皇帝や高位の聖職者を象徴する色であるから、写本の注文主あるいは献呈者がそうした位の人物であったということなのかもしれない。どうあれ、相当に豪華な写本であることは間違いない。

制作にたずさわった写生字や画家の献身、ロッサーノでこれを最初に発見した者の驚嘆を思っ、博物館をあとにした。

カテドラルの正面からガリバルディ大通りの尽きるところまで歩いていくと、岩山の斜面を見おろすようにしてビザンツ建築のサン・マルコ礼拝堂があり、さらにそこから坂を下ると怪しげな洞窟がいくつもある。弾圧を怖れて東方から逃れてきたイコン崇拜の修道士たちが、身をひそめて祈りつづけた場所とはここではなかったか。

今見たばかりの彩画のひとつ、ゲッセマネの間のなかで、十字架刑への恐怖に苛まれ、岩の地面にひれ伏すイエスの姿がふと頭に浮かんだ。

参考文献

-Christopher de Hamel, *Storia di dodici manoscritti*, Mondadori, 2017.

-*Guida al Museo Diocesano e del Codex*, Rossano.

-Franco Emilio Carlino, *Il Codex Purpureus Rossanensis, patrimonio dell'UNESCO nella bibliografia. Da Bisanzio allo scrigno del Museo Diocesano di Rossano e della letteratura mondiale*, Imago Artis, 2017.



【サン・マルコ礼拝堂のアプス】

(元当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>